

英語学研究と伝承文化研究の接点 —ひとつのパースペクティブ

中 澤 紀 子

Linguistic Studies and Nursery Rhymes: An Empirical Perspective

Noriko NAKAZAWA

0. はじめに

純理論的な英語学的構文研究と文化・文学的な伝承文化研究は、ともすれば、全く別の研究分野と見なされるかもしれない。実際、それぞれの領域で広く深い研究が行なわれて来たことは、我々のよく知るところである。

しかし、両者を有機的に結びつけるようなパースペクティブを持った研究は、私の知る限り、あまり行なわれて来なかったと思われる。そこで、両者を結びつける試みのひとつとして、筆者自身の理論的・実証的な研究を、このパースペクティブの中で位置づけ、その妥当性と将来の展望についての覚書を記しておきたい。

1. 英語学研究と伝承文化研究の双方向性—言語学的観点からのナーサリー・ライム研究と ナーサリー・ライムを言語資料とした文法研究

筆者は、1991 年度の海外留学によるカリフォルニア大学バークレー校、サンタ・クルーズ校を根拠地とする 1 年間のアメリカ合衆国滞在中に、日々の生活の中でナーサリー・ライム¹に出会い、文化的な面と言語学的な面から強く興味を引かれた。そして、米国滞在中に実際の場面でどんなうたがどんな風に用いられるかを中心に資料の収集を行なった。以来十数年に亘ってナーサリー・ライムを研究して行く中で 2 つの方向性が見えてきた。

1.1. 言語学的観点からのナーサリー・ライム研究

ひとつは、口承を主とした伝承文化であるナーサリー・ライムの背景にある文化史的側面、音楽的リズムの観点、ナーサリー・ライム自体の語彙・語法・文法という言語学的側面からナーサリー・ライムとは何かというその本質を深く探っていく方向である。

筆者のこの方向での研究には、①「伝承文化と言語環境に関する一考察—アメリカで出会ったマザー・グース」(1993年3月)²、②「伝承文化における語彙とイメージの喚起性—擬声語で始まるマザー・グース」(1993年9月)³、③「英語圏の伝承童謡にみられる共通の型について—『Little+ 人の名』で始まるマザー・グース」(1994年3月)⁴、④「マザー・グースのうたと日本の言い伝えについて (1) (2) (3) (1998年3月~2000年3月)⁵、⑤「Mary, Mary, quite contrary —マザー・グースと悲劇の女王」(2000年3月)⁶、⑥「マザー・グースのうたのリズム」(2001年3月)⁷、⑦「マザー・グースとわらべ唄のリズム—『あんたがたどこさ』は何拍子?」(2002年3月)⁸、⑧「ビアトリクス・ポターとナーサリー・ライム—テキストの挿入と削除から見えてくるもの」(2004年3月)⁹などがある。

①では、口承において変化しやすい部分と変化しない部分に注目して、言語習得の観点から実際に歌われているマザー・グースのうたを考察した。②では、英語を母語とする話者の語感を形成するもののひとつとして、マザー・グースのうたに現れる語彙とそれが喚起するイメージについて論じた。③では、マザー・グースのうたのいくつかに共通する場面設定とストーリー展開の型について考察した。そして理論言語学で用いられる「構文の拡張」と同様のメカニズムで、そういう共通の型を基に特定の言語表現を介して「うたの拡張」が起こるという言語学的にも興味深い現象について論じた。④の3つの論文は、日本の言い伝えとそれに相当するマザー・グースのうたを言語学の観点から交差分類を用いて分類し、典型的な語句のパターンや喚起するイメージに関する特徴をまとめ、比較研究を行なった。⑤では、個別のうたの歴史的・文化的背景と、様々な異形に基づいて考証されるテキストの「読みの重層性」がシンクロナイズ(同調)しているという興味深い現象を提示した。⑥、⑦は、うたのリズムと言語のリズムについて、英語と日本語の比較に焦点を当てて論じたものである。以上は、いずれも言語学的観点からのナーサリー・ライムの実証的研究として位置づけられる。⑧は、ビアトリクス・ポターがその「お話」の中に登場させたナーサリー・ライムのテキストとその当時流布していたと考えられるテキストとの比較を通して、作家の内面とその時代背景に迫ろうとしたものである。これは、言語学的観点からのナーサリー・ライムのテキスト比較という手法を文化・文学研究に取り入れた、新たな視点からの実証的研究である。

1.2. ナーサリー・ライムを言語資料とした文法研究

もうひとつの方向は、ナーサリー・ライムの口承文化としての性質、言語資料としての特性をふまえた上で、ナーサリー・ライムを言語資料として近代英語期の文法と現代英語の文法を研究する方向である。

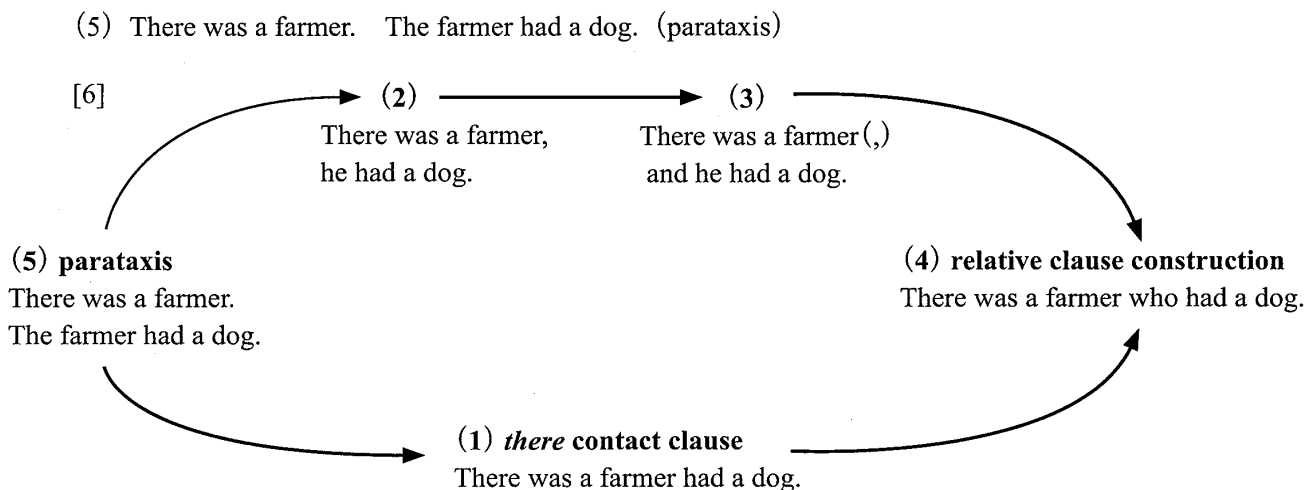
この方向に関しては、従来、口承の詩またはうたであるナーサリー・ライムを文法研究の資料として用いることは、私の知る限りでは行なわれて来なかった。そこで、ナーサリー・ライムを新たに文法研究の資料として用いることの妥当性については、説明が必要であろう。それについては、第2節で論じることにして、本節では、この新たな試みとして位置づけられる研究を概観したい。

筆者のこの方向での研究には、⑨ “*There Contact Clauses in English Nursery Rhymes*” (2003 年 12 月)¹⁰、⑩ “*Mother Goose’s Melody* (1791) における動名詞と現在分詞” (2006 年 3 月)¹¹、⑪ “*There 接触節と関係代名詞の顕在化—ナーサリー・ライムの場合*” (2006 年 5 月)¹² などがある。

⑨では、英語の文構造の史的発達研究において従来ほとんど活用されていなかった伝統的なナーサリー・ライムを資料として活用し、その中に数多く見られる (1) のような「there 接触節 (*there contact clause*)」とその他 (2) - (4) のような 3 種の「there 構文と後続節」の派生過程について新しい提案を行なった。

- (1) There was a farmer had a dog. (*there contact clause*)
- (2) There was a farmer, he had a dog. (*there 構文*, + 代名詞…)
- (3) There was a farmer(,) and he had a dog. (*there 構文*, + 接続詞 + 代名詞…)
- (4) There was a farmer(,) who had a dog. (*there 構文*, + 関係代名詞…)

すなわち、(5) のような「並列 (*parataxis*) 構造」から (4) のような関係節構文に至る派生過程は下図の [6] のように 2 つの経路に分かれている¹³ という仮説を立てることによって、(1) - (4) の型の *there* 構文の存在事実がうまく説明できるのである。



⑩に関しては、まず、それに先立つ筆者自身の研究として、「V-ing : 動名詞と現在分詞の分類をめぐって」(2005 年 3 月)¹⁴ がある。この研究においては、英語における動詞の -ing 形 (V-ing) の持つ文法機能のうち、派生名詞、動名詞、現在分詞について、それぞれの典型例は基本的にどんな特徴を有し、また、どんな特徴を共有してそれぞれの構造が拡張したり、二者が融合するのかを現代英語を対象とした共時的立場から考察した。その中で、特に動名詞と現在分詞について、それぞれの基本的特徴を持った‘基本形’から他方の特徴を取り込んで‘拡張’して行く際の重要な接点になったと思われる 3

つの環境を特定した。その研究に基づき、⑩では、*Mother Goose's Melody* (1791)¹⁵ に収録されたナーサリー・ライムを言語資料として用いることによって、現代英語だけでなく、近代英語期の口承の英語を対象として、そのような‘拡張’や‘融合’のメカニズムがいつ頃からどのようにして働き始めるのかという問題の手がかりを探った。

⑪では、17世紀前半から19世紀にかけて出版されたナーサリー・ライム集の原本（復刻版）に当たって調べた200篇余りのナーサリー・ライムを主な言語資料として、近代英語期における「there 接触節」を含む種々の「there 構文と後続節」の派生過程について、⑨の論文で提案した‘parataxis’から関係節構文に至る「派生の2経路説 (Two-Way Derivation Hypothesis)」によって、事実が過不足なく説明できることを実証的に見て行き、さらに、「there 接触節」において関係代名詞が顕在化して関係節構文になる際の動機付けについて、動的文法理論の観点から説明を与えた。

以上はいずれも、ナーサリー・ライムを言語資料とした新たな文法研究として位置づけられるものである。

2. ナーサリー・ライムを文法研究の資料として用いることの妥当性

1.2節で言及したように、口承の詩またはうたであるナーサリー・ライムは、従来、文法研究の資料としては、ほとんど利用されて来なかった。その理由としては、作者や成立年代の明らかなでない詩やうたを文法研究の資料として用いることは果たして妥当であろうかという疑問があったのかもしれない。

そこで、本節では、ナーサリー・ライムを文法研究の資料として用いることが妥当であると考えられる理由について少し詳しく述べて行きたいと思う。

まず第一に、ナーサリー・ライムは口承による伝承のうたであり、その時代時代において、子供に限らず大人も含めて一般大衆の中に生きた形で存在していたこと、また、現代にも生きた形で存在するということが挙げられる。換言すれば、ナーサリー・ライムは、一般大衆による口承のうたであるが故に定本というべきものは存在せず、その時代によって、あるいは地域によって、同じうたでも語彙、語法、文法の点において差異を含む様々な異形が生きた形で存在している。つまり、口承英語の生の姿を映している。従って、ナーサリー・ライムは、子供の言語習得においても、口語的な言語資料の一部としてその文法形成に充分関わり得るということである。

第二には、ナーサリー・ライムは、口承であるため、作者や成立年代は不明であるが、16世紀末からナーサリー・ライム集として出版されて活字に記録されるようになり、特に、18世紀、19世紀には John Newbery (1713-1767) や James Orchard Halliwell (1820-1889) によって大規模な集成が行なわれ、多くのナーサリー・ライムが活字として記録されるに至った。この時代は、ちょうど近代英語期に当たり、この時期に活字となったナーサリー・ライムは、近代英語の語形や文法構造を反映してい

ると考えられる。また、ナーサリー・ライムの現在の形は、筆者が米国で実際に収集したもの、他、英国における集大成と言われる Opie (1951, 1997) や米国における集大成と言われる Baring-Gould & Baring-Gould (1962) に記述された豊富な実例で詳細に比較・検討することができる。

次に、「何故ナーサリー・ライムを文法研究の言語資料として用いたのか」という問いに対する積極的理由としては、まず第一に、「there 接触節」を研究する際に、この構造は、現代英語では原則として許されない破格の構造を持ち、生起する環境も実例もごく限られたものであるが、筆者は、ナーサリー・ライムにこの there 接触節の例が豊富に見られることを永年にわたる事実観察で気付いていたからである。第二には、ナーサリー・ライムを言語資料として用いるための条件が整ってきたことが挙げられる。Opie (1951, 1997) の詳細にわたる研究には、同じ内容のうたでも、出版された年代や収集者・出版者によって様々な異形が存在することが示され、それぞれのうたの文献初出年代から、現代までの出典情報が細かく記述されているが、うたの異形については、異形全体が記載されている場合もあれば、現在の形と異なる部分のみが記載されている場合もあり、近代英語期の語形や文法構造を調べるには、これらの出典情報や異形に関する情報だけでは不十分であった。しかし、近年、近代英語期に出版されたナーサリー・ライム集の重要なものが次々と復刻され、直接原典（復刻版）に当たって語形や文法構造を調べることが可能になった。

以上のような理由で、筆者は、従来、言語研究における資料としてはほとんど利用されて来なかったナーサリー・ライムに関して、その資料的価値と妥当性を認めて、これからの言語研究に積極的に使って行こうと考えている。

3. 英語学研究と伝承文化研究の接点と展望

筆者の英語学研究は、言語理論の方法論に基づいて現代英語の様々な構文に焦点を当て、十分な事実観察を通して特に複数の構文間の分析を行ない、その分析に理論的説明を与えることを目標にして進めてきた。この目標は、今後も変わらないが、近年になって、ナーサリー・ライムを言語資料として利用し始めたことをきっかけとして、研究対象を現代英語に限定せず、近代英語期から現代英語に至る通時的研究も射程に入れて、共時的観点からだけでなく、歴史的観点からも、英語の構造の分析にそれを支持する証拠を提示できるような研究が可能になって来た。この点が、まさに英語学研究と伝承文化研究の接点と言えるだろう。

また、英語学研究と伝承文化研究のそれぞれの領域について研究を深めることは言うまでもないが、両者の関係の双方向性については、今後ともそれぞれの方向から他方を検証する研究を充実させることによって、相乗的な研究の進展を期したいと思う。

註

1. ナーサリー・ライム (nursery rhymes) とは、英国をはじめとする英語圏で、主に口承により伝承されている伝統的な詩や童謡の類を指し、「マザー・グース (Mother Goose) のうた」と呼ばれることも多い。
2. 「伝承文化と言語環境に関する一考察—アメリカで出会ったマザー・グース」『大東文化大学紀要』第31号, 227-240. 1993年3月31日.
3. 「伝承文化における語彙とイメージの喚起性—擬声語で始まるマザー・グース」『大東文化大学創立七十周年記念論集』(上巻), 145-167. 1993年9月20日.
4. 「英語圏の伝承童謡にみられる共通の型について—『Little+ 人の名』で始まるマザー・グース」『大東文化大学紀要』第32号, 145-159. 1994年3月31日.
5. 「マザー・グースのうたと日本の言い伝えについて(1)—戒めと縁起かつぎに関する日本の言い伝え」『人文科学』第3号, 97-121. 大東文化大学人文科学研究所. 1998年3月31日.
「マザー・グースのうたと日本の言い伝えについて(2)—動物を題材にした言い伝え」『人文科学』第4号, 63-81. 大東文化大学人文科学研究所. 1999年3月31日.
「マザー・グースのうたと日本の言い伝えについて(3)—天候・気象予測に関する言い伝えを中心として」『人文科学』第5号, 27-52. 大東文化大学人文科学研究所. 2000年3月31日.
6. 「Mary, Mary, quite contrary —マザー・グースと悲劇の女王」『英米文学論叢』第31号, 111-132. 2000年3月15日.
7. 「マザー・グースのうたのリズム」『人文科学』第6号, 17-37. 大東文化大学人文科学研究所. 2001年3月31日.
8. 「マザー・グースとわらべ唄のリズム—『あんたがたどこさ』は何拍子?」『人文科学』第7号, 15-56. 大東文化大学人文科学研究所. 2002年3月31日.
9. 「ビヤトリクス・ポターとナーサリー・ライム—テキストの挿入と削除から見えてくるもの」『英米文学論叢』第35号, 111-132. 2004年3月15日.
10. “There Contact Clauses in English Nursery Rhymes,” S. Chiba et al. (eds.) *Empirical and Theoretical Investigations into Language*, 524-537. 開拓社. 2003年12月20日.
11. 「Mother Goose’s Melody (1791) における動名詞と現在分詞」『英米文学論叢』第37号, 27-41. 2006年3月15日.
12. 「There 接触節と関係代名詞の顕在化—ナーサリー・ライムの場合」『近代英語研究』第22号, 71-91. 近代英語協会. 2006年5月1日.
13. 図[6]の下辺の経路のうち、(5)のような「並列(parataxis)構造」から(1)のような「there 接触節(there contact clause)」が派生する際には、Jespersen (1927, 1949) の言う *apo koinou*, すなわち「共有構文」の原則が働くと考える。また、[6]の図式は、概略的なものであり、(1)(2)

(3) のタイプがすべて (4) のタイプに収束することを意味するのではない。(1) (2) (3) は、それぞれ、その形式のままでも現代まで生き残ることが可能であり、事実としても (4) の構造と並存している。

14. 「V-ing : 動名詞と現在分詞の分類をめぐって」『英米文学論叢』第 36 号, 49-75. 2005 年 3 月 15 日.
15. このナーサリー・ライム集は、英国のナーサリー・ライムに初めて「マザー・グース (Mother Goose)」という名を冠したものとして知られている。Opie (1951, 1997) や Baring-Gould & Baring-Gould (1962) は、Oliver Goldsmith がこの童謡集に独特のとぼけた註解を付けた隠れた編集者であり、一般には編者とされる John Newbery は出版業者なのだろうと考えている。

参考文献

言語学関係

- Bever, T. G. and D. T. Langendoen (1971) "A Dynamic Model of the Evolution of Language," *Linguistic Inquiry* 2, 433-463.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Jespersen, Otto (1927, 1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, part III. George Allen & Unwin Ltd., London; Ejnar Munksgaard, Copenhagen.
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.
- Kajita, Masaru (2002) "A Dynamic Approach to Linguistic Variations," *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, ed. by Yasuhiko Kato, 161-168. Sophia University.
- Lambrecht, Knud (1988) "There was a farmer had a dog: Syntactic amalgams revisited," *BLS* 14, 319-339.
- McCawley, James D. (1981) "The Syntax and Semantics of English Relative Clauses," *Lingua* 53, 99-149.
- McNally, Louise (1997) *A Semantics for the English Existential Construction*. Garland.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London and New York.
- Ukaji, Masatomo (2003) "Subject Zero Relatives in Early Modern English," *Current Issues in English Linguistics*, ed. by M. Ukaji, M. Ikeuchi and Y. Nishimura, 248-277. Kaitakusha.

ナーサリー・ライム集およびナーサリー・ライム研究 ※出版年代順

Gammer Gurton's Garland or The Nursery Parnassus (R. Christopher), 1784. Enlarged editions (Christopher and Jennett), c. 1799; (R. Triphook), 1810.

Mother Goose's Melody; or, Sonnets for the Cradle (Francis Power), 1791.

Mother Goose's Melodies, The Only Pure Edition (Munroe & Francis), 1833.

James Orchard Halliwell, *The Nursery Rhymes of England*, 1842. Revised and enlarged, 1843, 1844, 1846, 1853,

and c. 1860. *Popular Rhymes and Nursery Tales*, 1849 and c. 1860.

Opie, Iona and Peter (1951) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 1st ed. Oxford University Press.

Baring-Gould, William S. and Ceil Baring-Gould (1962) *The annotated Mother Goose, with an Introduction and Notes*. Bramhall House, New York.

Opie, Iona and Peter (1997) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 2nd ed. Oxford University Press.

(2006 年 9 月 25 日受理)